

# 永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2022 年 1 月

「神のみかたちを回復する」 「天の最高裁判所（Ⅰ）」 「律法におけるキリストの義」 「ブロッコリーの豆腐キッシュ」

# 永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

## 目次

### 今月の聖書勉強

#### 「天の最高裁判所 (I)」

4

聖書の教え

### 朝のマナ

#### 神のみかたちを回復する

8

Restoring the Image of God

### 現代の真理

#### 「律法におけるキリストの義」

40

キリストと律法

### 力を得るための食事

#### 「ブロッコリーの豆腐キッシュ」

46

レシピ

### お話コーナー

#### 「すべてのものは、どのように始まったか? (II)」

48

#### 【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1  
電話：0494-22-0465

#### 【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21  
電話：0980-55-8136

発行日 2021年12月5日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: iStock on Front page; Sermon View on page 48

アクセス [www.4angels.jp](http://www.4angels.jp)

メール [sdarm.shomaru@gmail.com](mailto:sdarm.shomaru@gmail.com)

Printed in Japan

## 知能の発育

長年にわたって教育は、主に暗記に力が注がれてきた。暗記の能力には極度の負担が負わされてきたが、他の知的な能力はそれほどまでに発達させられなかった生徒たちは頭に知識を詰め込むことに時間を費やして努力しても、その知識の中で実際に役に立つものは少なかった。このように、消化することも、わがものとする 것도できない事柄を詰めこまれた頭脳は弱くなり、自分の力で活発に施行することができなくなり、他人の判断や理解に依存して甘んじている。(教育 272)

正しいことと悪いことを見分ける能力は、各人がそれぞれ神により頼むことによつてのみ得られる。各人は自分自身でみ言葉を通して神に学ばなければならない。論理的に思考する能力は、使うために与えられているのであって、神はこれを働かせるようにお望みになっているのである。「さあ、われわれは互に論じよう」と神は招いておいでになる。神に頼ることによつてわれわれは、「悪をすて、善を選ぶ」知恵を持つことができる。(教育 273)

神はわたしたちに考え、行動する力を与えられたが、神に知恵を求めながら注意深く行動することによつて責任に耐える者となる。神から与えられた個性をもつて立ち上がり、…神は自分のうちに働き、自分によつて働き、自分を通して働かれることを期待しなさい。

十分に学んだから、そう努力しなくてもよいと考えてはならない。教育された頭脳は人間の尺度であり、教育は一生継続すべきもののなのだから、毎日学び、そこに得た知識を実際に応用すべきである。

どんな地位に立とうと、奉仕の中に心の動機を表し、品性を発達させていることを覚え、その働きが何であつても、正確と勤勉をもつて行い、やさしい仕事を求めようとする傾向に打ち勝つがよい。

日常の働きに打ち込んでいるのと同一精神、同一主義がその人の全生涯に及ぶのである。…体力、知力、精神力をどうしたら最小限にしか使わないですむかを研究している人は、神が豊かな祝福をお注ぎになることのできない働き人である。…一つ一つの義務を定めなければ働かない人は良い忠実なしもべとは言えない。元気、高潔、勤勉で、必要なことを何でも喜んでする、そういう働き人を必要としているのである。

多くの人は失敗を恐れるため、責任を回避し、無能力になる。そして体験を通して学ぶ教育を受け損じるのである。これは読書や勉強やその他あらゆる特典にあずかつても得られない教育である。(ミストリー・オブ・ヒーリング 485, 486)

## 第26課 天の最高裁判所 (I)

### 人が裁かれる時

「人をさばくな。自分がさばかれたいためである。あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう」(マタイ 7:1, 2)。

裁判は、説明責任の時です。なされたあらゆる善が、悪い心や国の法律に対する違反を正当化することはありません。

わたしたちは、正しい行為をどのように考えてきたでしょうか。健康や円満な交流の自然の法則にどのように関わってきたでしょうか。神の義なる十戒は、わたしの心の中に存在していたでしょうか。さらに重要なこととして、わたしたちの生活において、神はどこに入っておられたでしょうか。

キリスト教は、(第18課で学びましたように) 人間の死後について複数の見解を考案してきました。しかし、さまざまな意見があっても、神はすべての人が墓の後に天の裁判を受けなければならないと仰せになります。

「そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが、人間に定まっているように」(ヘブル 9:27)。

良い人であるか悪い人であるかにかかわらず、すべての人は、自分の行いに応じた報いを受けるために、天における裁判を受けなければなりません。死んだ人々および生きている人々は、天の書物に記載されている彼らについての記録に従って裁かれることになります。

天の裁判においては、誤りが生じることはありません。罪人が釈放されることはなく、また義人が有罪宣告を受けることもありません。裁判は、義と真理のうちになされます。これが、天の物差しです。

「あなたは天で聞いて行い、あなたのしもべらをさばき、悪人を罰して、そのおこないの報いをそのこうべに帰し、義人を義として、その義にしたがって、その人に報いてください」(列王記上 8:32)。

## 最高裁判所

天における最高裁判所には、義のうちに運営される合法的な仕組みがあります。そこには、虚偽の陳述や欺きの可能性はありません。

「しかし主はとこしえに、み位に座し、さばきのために、みくらを設けられました。主は正義をもって世界をさばき、公平をもってもろもろの民をさばかれます」(詩篇 9:7,8)。

「わたしが見ていると、もろもろのみ座が設けられて、日の老いたる者が座しておられた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりもののない羊の毛のようであった。そのみ座は火の炎であり、その車輪は燃える火であった。彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。」(ダニエル 7:9,10)。

## 天の最高裁判所の構成

法的な仕組みを構成するためには、裁判所に被告人、弁護人、告訴人、検察官、裁判官、陪審員、および被告人を裁くための法律が必要となります。ほとんどの裁判では、裁判所に被告人に同伴者が付きそうことが許されます。天の裁判所もこれと同様です。

### 1. 裁判官は神である

「それはさばきを行われる神であって、神はこれを下げ、かれを上げられる」(詩篇 75:7)。

「天は神の義をあらわす、神はみずから、さばきぬしだからである。セラ」(詩篇 50:6)。

「... 万民の審判者なる神...」(ヘブル 12:23)。

### 2. 陪審員は 24 人の長老からなる

「また、御座のまわりには二十四の座があつて、二十四人の長老が白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶつて、それらの座についていた」(黙示録 4:4)。

「すると、二十四人の長老と四つの生き物とがひれ伏し、御座にいます神を拝して言った、『アアメン、ハレルヤ。』」(黙示録 19:4)。

### 3. 被告人は人類である

「次のように書いてある、『義人はいない、ひとりもない。…すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており』」（ローマ 3:10,23）。

「このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいつてきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである」（ローマ 5:12）。

「わたしはまた、日の下を見たが、さばきを行う所にも不正があり、公義を行う所にも不正がある。」（伝道の書 3:16）。

「だから、わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである」（ローマ 14:12）。

「あなたの計りごとは大きく、また、事を行うのに力があり、あなたの目は人々の歩むすべての道を見て、おのおのの道にしたがい、その行いの実によってこれに報いられます」（エレミヤ 32:19）。

### 4. 弁護人はイエス・キリストである

「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる。」（ヨハネ第一 2:1）。

「だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」（ローマ 8:34）。

「わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。このようにして、わたし自身は、心では神の律法に仕えているが、肉では罪の律法に仕えているのである。」（ヘブル 7:25）。

### 5. 告訴人、検察官は悪魔である

「この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。そ

の時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、『今や、われらの神の救と力と国と、神のキリストの権威とは、現れた。われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神のみまえて彼らを訴える者は、投げ落された』(黙示録 12:9,10)。

「時に主は大祭司ヨシュアが、主の使の前に立ち、サタンがその右に立って、これを訴えているのをわたしに示された。」(ゼカリヤ 3:1)。

「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるしのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている」(ペテロ第一 5:8)。

## 6. 同伴者は、数えきれないほどの天使たちである

「しかしあなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の天使の祝会」(ヘブル 12:22)。

「さらに見ていると、御座と生き物と長老たちとのまわりに、多くの御使たちの声が上がるのを聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍もあつて」(黙示録 5:11)。

## 7. 天の御国の法律

「事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである」(伝道の書 12:13,14)。

「だから、自由の律法によってさばかるべき者らしく語り、かつ行いなさい」(ヤコブ 2:12)。

# 神のみかたちを回復する

*Restoring the Image of God*



1月

わたしたちの創造主にして救い主



## キリストと創造

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、彼によってできた。できたもののうち、一つとして彼によらないものはなかった。」(ヨハネ 1:1-3 英語訳)

万物は神の御子によって創造された。(ビュー・アッド・ヘラルド 1910 年 8 月 18 日)

この地球がキリストによって創造されたとき、神聖で美しかった。神はそれを「はなはだ良」と仰せになった(創世記 1:31)。一つ一つの花、灌木、木が自分たちの創造主のご目的に応えた。(パイプル・エコー 1900 年 5 月 21 日)

主イエスは天地にある事物の造り主であり、ご自身の真理の解説者であられたので、神の栄光の光を反映するようにと、自然にお命じになった。空飛ぶ小鳥、野にある草花、森の木々、実りの多い畑、不毛の地、鎌を入れるばかりになった穀物、果物のならない木、日の出と日の入り、種まき、産物の取り入れ、一すべては神の真理の象徴として用いられている。このお方は創造主の目に見える働きと命のみ言葉を結び合わせ、人の思いを自然から自然を造られた神へとお向けになる。一つ一つのつましやかな灌木、繊細な草花は神の愛の心の証を担う。もし目が閉じていなければ、もし耳が鈍くなっていなければ、もし心が神の御霊の印象を受けるために開いているなら、自然は、自然的なものと霊的なものの調和を告げる。キリストは、自然界から引き出される実例を通じて、非常に重要な教訓を魂に教えてこられた。であるから、このお方がご自分の教訓に結びつけられた対象を熟考するかたわら、そのみ言葉を考えることにより、神聖な重要性がさらに思いに明らかになる。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1892 年 10 月 24 日)

神は、イエス・キリストによって一香や、何かつかみどころのないものでなく、個性を持っておられる神は一人を創造し、彼に知性と権威をお授けになった。(今日神と共に 273)

過ちによってかたくなにならず、偽りの理論によって歪められていない心—誠実に何が真理であるかを知りたいと願う心は、キリストが魂にもたらすメッセージを喜んで受け入れる。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1892 年 10 月 24 日)

1月2日

## 神のかたちに造られた

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」(創世記 1:27)

地は創造主のみ手により非常に美しく現れた。山々、丘、平原があり、それらの間に川や湖水が点在していた。地は一つの広大な平原ではなく、丘や山々は今のように高く荒削りでなく、調和が取れた美しい形で、景色の単調さは破られていた。むき出しの高い岩は見られず、地の骨組みとしての役割を果たし、表面の下に敷かれていた。多量の水は規則正しく分散していた。丘、山々、平原は草木や花々で飾られ、今の木々よりも何倍も高くはるかに美しい、あらゆる種類の高い堂々たる木々で飾られていた。空気は清らかで健康的であり、地は気高い宮殿のように見えた。天使たちは神の素晴らしい、美しいみ業を眺めて喜んだ。

地が創造され、獣がそこに創造された後、御父と御子はサタンの墮落の前に計画しておられた、ご自身の形にかたどって人を造るという目的を実現された。御父と御子は地とその上に住む生き物をことごとく創造するにあたって共に働かれた。そして今神は御子に「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造」ろうと仰せになる(創世記 1:26)。アダムが創造主のみ手によって現れたとき、彼は背が高く、みごとに均整が取れていた。彼は今地上に生きている人々の二倍以上の背丈があり、よく釣り合いが取れていた。彼の顔立ちは完全であり美しかった。顔色は白くも黄ばんだ色でもなく、血色の良い健康にあふれた顔色であった。エバはアダムほど背は高くなく、彼女の頭は彼の肩より少し上であった。彼女も気高く一完全に均整が取れており、非常に美しかった。

この罪のない夫婦は手で作った衣服を着ていなかった。彼らは天使が着るような、光と栄光の衣をまとっていた。(預言の霊 1 巻 24, 25)

## 美しい園の家庭

「主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた。」(創世記 2:8)

神が造られた一つ一つが美の極みであり、神がアダムとエバを幸福にするために創造された地上に何も欠けているようには見えなかったけれども、このお方は彼らのために特別に園に植物を植えることで彼らに対するご自分の大いなる愛を表された。彼らの時間の一部分は園を整える幸福な仕事に、一部は天使の訪問を受けて、彼らの教えに耳を傾けるために、幸福な瞑想に当てられるべきであった。彼らの労働は疲れさせるものではなく、楽しい元気づけるものであった。この美しい園は彼らの家庭、彼らの特別な住まいとなるべきであった。

主はこの園の中に有用性と美しさのためにあらゆる種類の木々を配置された。そこには香り豊かで、目に美しく、おいしい、神が聖なる夫婦の食物となるように計画された、よく育った果物がたわわになっている木々があつた。そこには、墮落以来だれも見たことのないような、実の房をたわわにつけ、まっすぐに伸びているぶどうの木があつた。その実は非常に大きく、さまざまな色であり、あるものはほとんど黒に近く、あるものは紫、赤、ピンク、薄緑であつた。ぶどうの枝についている美しくよく育った実はぶどうと呼ばれた。それらは地面を這わず、蔓(つる) 柵で支えられなくても実の重みで垂れ下がることはなかった。香り高い実をたわわにつけた、自然の美しい生きた木々と葉で住まいを形づくりつつ、ぶどうの枝を仕立て、美しい木陰の休息所をつくることはアダムとエバにとって幸せな働きであつた。

あらゆる種類と色合いの香りたかい無数の草花が、あちこちにあふれるばかりに生えている一方で、地は美しい新緑で装われていた。なにもかも趣(おもむき)があり、燦然と配列されていた。園の中央には他のすべての木にまさって栄光に輝く命の木が立っていた。その実は金と銀の混じったりんごのように見え、不死を永続させるためのものであつた。(預言の霊 1 巻 25, 26)

1月4日

## 楽しい生活

「〔あなたは〕ただ少しく人を天使よりも低く造って、栄えと誉とをこうむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。」(詩篇 8:5, 6 欽定訳)

エデンにいる聖なる夫婦は非常に幸せであった。彼らにはあらゆる生き物への無限の支配権が与えられた。ライオンと小羊は彼らの周りで平和に無邪気に戯れる、あるいは彼らの足元でまどろんだ。あらゆる色と羽の小鳥たちが木々や草花の間またアダムとエバの周りを飛びまわり、彼らのやわらかく美しい音色の快い響きは、創造主をたたえて美しい調和のうちに木々の間をこだました。

アダムとエバは彼らのエデンにある家庭の美しさに魅了された。彼らは自分たちの周りにいる小さな歌手たちが輝く優美な羽根をまとい、幸福な快い音楽をさえずり続けているのを楽しんだ。聖なる夫婦は小鳥たちと一緒に、自分たちを取り囲む愛のしるしのゆえに、御父とこのお方の愛する御子への愛と賛美と崇拜の調和の取れた歌に彼らの声をあげ、小鳥たちと和した。彼らは無限の知恵と知識を語る創造の秩序と調和を認めた。彼らは、エデンの家庭の何か新しい美しさとさらなる栄光を絶えず発見し、それらは彼らの心を深い愛で満たし、彼らの唇から創造主への感謝と崇敬の表れが出た。(預言の霊1巻 26, 27)

アダムには、天の小模型であるエデンにおいて神のみ働きにおける計画のための主題があった。神は、人がご自分の栄光に満ちたみ働きを単に熟考するために形づくられたのではなかった。それゆえこのお方は彼に熟考のための思いと心と同様働くための手をお与えになった。もし人の幸福が何もしないことにあるなら、創造主はアダムに定まった働きをお与えにはならなかった。人は瞑想と同様労働にも幸福を見出すべきであった。(ビュー・アンド・ヘルド 1874 年 2 月 24 日)

最初の両親のエデンの家庭を並外れて麗しく造られた神は、わたしたちの幸福のために、威厳のある木々、美しい草花、自然界にあるあらゆる美しいものもまた与えておられる。(健康改革者 1871 年 7 月 1 日)

## 自然界の神秘を喜ぶ

「あなたは知っているか、雲のつりあいと、知識の全き者のくすしきみわざを。」(ヨブ 37:16)

聖なる夫婦は、神から父としての世話を受ける子であるばかりでなく、知恵にみちた創造主から教えを受ける生徒でもあった。彼らは天使たちの来訪を受け、何の隔てもなく、創造主と交わることを許された。彼らは命の木によって与えられた生気に満ち、彼らの知力は天使よりわずかに劣るだけであった。目に見る宇宙の神秘―「知識の全き者のくすしきみわざ」―は彼らにとって尽きない教えと喜びの泉であった(ヨブ 37:16)。過去六千年の間、人間が研究を続けてきた自然の法則と作用は、万物の創造者であり、維持者である無限のお方によって、彼らの思いに開かれた。彼らは木の葉、草花、樹木と語り、それぞれの命の神秘を学んだ。アダムはあらゆる生物、水中に遊ぶ巨大な海魚から日光の中に小さな昆虫にいたるまで、被造物を熟知していた。彼はおのおのに名を与え、すべてのものの性質と習慣によく通じていた。もろもろの天の神の栄光、整然と運行する無数の世界、「雲のつりあい」(ヨブ 37:16)、光と音、昼夜の神秘などのすべては、われわれの初めの両親の研究の課題であった。森林のあらゆる葉に、山々の岩石に、すべての輝く星に、大地に、大気に、大空に、神のみ名が記されていた。造られた世界の秩序と調和は、無限の知恵と力とを彼らに語った。彼らは自分たちを強くひきつけ、彼らの心を深い愛で満たし、新たな感謝の声をあげさせるものを常に発見するのであった。

彼らが神の律法に忠誠を尽くしているかぎり、知って、理解を深め、愛する彼らの能力は絶えず啓発されるのであった。彼らは常に新しい知識の宝庫を手に入れ、新しい幸福の泉を発見し、神のはかり知れない不滅の愛について、ますます明瞭な観念をいただくようになるのであった。(人類のあけぼの上巻 26, 27)

1月6日

## 本来の実質的な教室

「〔アダムとエバは〕日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。(創世記 3:8)

天地が創造された時に定められた教育制度は、後世にいたるまで、人類の模範となるべきものであった。その原則を実地に示すものとして、人類の始祖の故郷であるエデンにモデル・スクールが設けられた。エデンの園が教室であり、自然が教科書であり、創造主ご自身が教師であり、人類家族の両親であるアダムとエバが生徒であった。

「神のみかたちと栄光」として創造されたアダムとエバは、そのとうい身分にふさわしい才能をさずけられていた(コリント第一 11:7)。優美で均整のとれた肢体、美しくととのった容貌、健康と喜びと希望にかがやく顔色、彼らのそうした外観は、創造主のみかたちに似ていた。このように似かよった点は、ただ肉体の面ばかりではなかった。知能と魂のあらゆる面に、創造主の栄光が反映していた。アダムとエバは、「御使たちよりも低」くつくられ(ヘブル 2:7)、高い知的および霊的な賜物を授けられていた。それは、彼らが目に見える宇宙の神秘を認識するばかりでなく、また霊的な責任と義務を理解することができるように与えられたのであった。……

ご自分の子らに関心をおよせになる父なる神は、自ら彼らの教育を指導された。聖天使たちは、神の使者として、たびたび彼らを訪れては、神の教訓と勧告を伝えた。日の涼しいころ、アダムとエバが園の中を歩いていると、よく神のみ声がきこえてきた。こうして彼らは、永遠の神と顔をあわせて交わりを続けた。彼らに対する神の思いは、「災を与えようというのではなく、平安を与えよう」(エレミヤ 29:11) との思いであった。神のみこころの一つ一つは、彼らの最高の幸福ということにあった。……

自然界の法則と営み、また霊界を支配する真理の大原則は、万物の創造主であり限りない存在であられる神によって、彼らの心に示された。……彼らは、自分たちの神聖な存在に、最高の歓喜をおぼえた。(教育 10-12)

## すべての時代のための模範学校

「しかし獣に問うてみよ、それはあなたに教える。空の鳥に問うてみよ、それはあなたに告げる。あるいは地の草や木に問うてみよ、彼らはあなたに教える。海の魚もまたあなたに示す。これらすべてのもののうち、いずれか主の手がこれをなしたことを知らぬ者があろうか。すべての生き物の命、およびすべての人の息は彼の手のうちにある。」(ヨブ 12:7-10)

「神は自分のかたちに人を創造された」(創世記 1:27) としるされている。神の御目的は、人が長く生きれば生きるほど、ますます、はっきりと神のみかたちをあらわすこと、すなわちなおいっそう明らかに創造主の栄光を反映することであった。人間のあらゆる才能は発達することが可能であって、それらの才能の能力と活力はたえず増大することになっていた。そうした才能を働かせるために、広い機会が与えられ、研究のために輝かしい分野が開かれていた。目に見える宇宙の神秘、すなわち、「知識の全き者のくすしきみわざ」(ヨブ 37:16) が人の研究を招いていた。創造主と顔をあわせて、心と心の交わりをすることが、アダムのとつといの特権であった。もし彼が、神への忠誠心を変えなかったなら、この特権は、永久に彼のものとなったであろう。彼は、永遠にわたってたえず知識の新しい宝を手に入れ、幸福の新しい泉を見だし、神の知恵と力と愛についていよいよ明らかな概念を持ちつづけたであろう。(教育 4)

エデンの園は、全地をこのようにしたいという神のご希望のあらわれであった。人類家族の数がふえるにしたがって、エデンの園で神からあたえられたのとおなじような他の家庭や学校を設けるようにというのが神のみこころであった。こうして全地は、時がたつにつれて、神のみ言葉とみわざを学ぶ家庭や学校で満たされ、生徒たちは、永遠にわたって、神の栄光を知る光を、ますます深く反映するのにふさわしい者となるはずであった。(教育 12)

エデンにおいて確立された教育の制度は、家族を中心とするものであった。アダムは「神の子」であった(ルカ 3:38)。神の子らは、父なる神から教えをうけた。彼らの学校は、真の意味において、家庭学校であった。(教育 26)

1月8日

## エデンでの待ち遠しい日

「神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終わって休まれたからである。」(創世記 2:3)

エデンで設けられた安息日の制度は、世界の誕生と共に古い。(人類のあけぼの上巻 397)

第四条はその起源を創造のときに置く。創造主の休息の日は聖なるエデンでアダムによって聖別された。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1884 年 2 月 24 日)

もし人が常に安息日を守っていたなら、世に不信心者、不信仰者、無神論者は決していなかったことであろう。もしアダムとエバが、世を創造することにおける神のみ働きを熟考していたなら、もし彼らが、神が彼らに安息日をお与えになった理由をよく考えていたなら、もし彼らの幸福のために加えることのできるものは何一つ差し控えずに与えて下さった美しいしるしを彼らが眺めていたなら、彼らは安全であり、自分たちに対するこのお方のいつくしみと愛のゆえに、このお方をあがめ、神に非難を浴びせるサタンの詭弁に耳を傾ける代わりに、神のみ手のわざに注意を払い、快い調べ、感謝、ほめたたえる賛美が彼らの口からほとばしりでていたであろうに。もし彼らが、神が自分たちをどれほどご自分のあふれるばかりの愛の対象としておられたかをよく考えていたなら、墮落することはなかったのである。しかし彼らは神のご臨在を忘れた。彼らは、み使いたちがあらゆる危険から彼らを守るために、彼らの周りを取り囲んでいることを忘れ、大いなる恩人であるお方から目をそらした。

安息日は現代へのテストである。霊とまこととによって第四条の戒めに従うことで、人々は十戒の教訓すべてに従う。この戒めを成就するために、人は神を最高に愛し、このお方が造られたすべての被造物に愛を働かせなければならない。主はわたしたちに「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と熱心にお勧めになる(出エジプト 20:8)。そしてそのとき以来、これはこのお方の熱心な勧めであるので、だれかがこの戒めを彼らの記憶にもたらすことで彼らをうんざりさせるとわたしたちを責めるのであろうか。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1896 年 2 月 13 日)



## 道徳上の品性のテスト

「主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。

(創世記 2:16,17)

人類の始祖アダムとエバは、罪のない聖なる者につくられたが、絶対に悪いことができないようにはつくられなかった。神は、彼らをご自身の要求にそむく能力のない者におつくりになることもできたであろう。しかし、もしそうであったなら、品性の向上はあり得ず、彼らの奉仕は自発的でなく、強制的なものとなったであろう。そこで神は、彼らに、選択の能力すなわち服従するかあるいは服従を拒むか、そのどちらでもできる能力をお与えになったのである。そして彼らは、神が彼らに与えようと望んでおられる祝福をもれなく受けるに先だって、まずその愛と忠誠心を試みられなければならなかった。……

神のみこころは、アダムとエバが悪を知らないようにということであった。善の知識は惜しみなく彼らに与えられていたが、悪の知識すなわち罪とその結果である苦勞、煩悶、失望、悲嘆、苦痛、死といったようなことは、愛のゆえに、彼らに知らされずにいた(教育 14)

主は人に猶予の期間を置かれたが、それは彼が自分自身の幸福のために、また創造主の栄光のために、堅固な正直さの品性を形づくることのできるためであった。このお方はアダムにご自分が造られた他のどの被造物にもまさった思いの力をお授けになっていた。彼の精神力は天使よりも少し低いだけであった。……

アダムに与えられた最初の道徳上の教訓は自己否定の教訓であった。自己統治の手綱は彼の手の内にあった。判断、理性、良心が支配すべきであった。

……

アダムとエバは一つを除いて園にあるどの木からも取って食べることを許されていた。一つの禁止があった。許されていない木は園にある他の木々と同じように魅力的で美しかった。それは神が「取って食べてはならない」と仰せになったその木の実を食べると罪の知識と不従順の経験を持つので、知識の木と呼ばれた(創世記 2:17)。(コンポジション 12)

1月10日

## 邪悪な陰謀が始まる

「さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。へびは女に言った、「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか。」(創世記 3:1)

エバは草花の色や香りで感覚を楽しませ、木々や茂みの美しさに感嘆しながら、夫のそばから離れて行った。彼女は、神が知識の木に関して、自分たちの上に置かれた制限のことを考えていた。エバは、あらゆる必要を満足させるために主が備えてくださった美しいものと恵み深さを喜んだ。これら全ては楽しむようにと神がわたしたちに与えてくださった、と彼女は言った。それらは全てわたしたちのもの。なぜなら神が「主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない」と仰せになったから(創世記 2:16,17)。

エバは禁じられた木の近くを歩き回っていた。そして死がこのきれいな木の実の中にどのように隠れていることができるのかを知りたいという好奇心が起こった。彼女は、見知らぬ声が自分の疑問を取り上げ、くりかえしたのを聞いて驚いた。「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」(創世記 3:1)。

エバは、自分と聞こえるように話している中に、自分の考えが表されていることに気づけなかった。それゆえ、自分の疑問がへびによって繰り返されるのを聞いて非常に驚き、そのへびには彼女の考えていることが分かるので、非常に賢いに違いないと、本当に思った。(コンポジション 12, 13)

わたしたちは常に誘惑から来る考えを妨げることはできないが、それらを口に出さないように、敵に抵抗することはできる。魂の敵は人々の考えを読み取ることとは許されていないが、彼は鋭敏な観察者であり、言葉と行動に注意し、それに応じて自分の誘惑を上手に適合させる。……

ああ、一瞬間でも幕が分かれ、全天が人類に抱いている関心をあなたが見ることができるなら! 神と天のみ使いたちは、わたしたちが自分自身を全ての罪から清めないかどうかを見ようと熱心に待っている。(ヒストリカル・スケッチ 146)

## 一步一步巧みな計略

「なぜ疑ったのか。」(マタイ 14:31)

もう二度と神の恵みにあずかる可能性がなくなったことをはっきりとサタンが知ったとき、彼の悪意と憎しみが現われ始めた。彼は、彼の天使たちと謀って、なおも、神の統治に反抗する計画を立てた。アダムとエバが、美しい園におかれたときに、サタンは、彼らを滅ぼす計画を立てていた。この幸福な夫婦は、神に従ってさえおれば、その幸福を奪われることはできなかった。彼らがまず神にそむき、神の恵みを失うのでなければ、サタンは、彼らに働きかけることはできなかった。であるから、彼らを不服従に導き、彼らが神の不興を招いて、サタンと彼の天使たちの直接の影響のもとに陥るような計画をたてなければならなかった。サタンが姿を変えて、人間に対する関心を示すようにすることが決定された。彼は、遠回しに神の真実性を否定し、神が言われたことが真実であるかどうかを疑わせなければならなかった。次に、彼らの好奇心を起こさせて、神のはかり知ることができない計画をせんざくさせなければならなかった。これは、サタン自身が犯した罪そのものであった。そして、神はなぜ善悪を知る木について禁令を発せられたのかを、彼らに考えさせなければならなかった。(初代文集 256, 257)

〔サタンは〕やわらかい、快い言葉で、音楽のような声で、不思議に思っているエバに話しかけた。彼女はへびが話すのを聞くことにびっくりした。彼は彼女の美しさと非常な素晴らしさを誉めそやし、それは彼女にとって不快ではなかった。しかし彼女はびっくりした。なぜなら神はへびに話す力を与えてはおられないことを彼女は知っていたからである。

エバの好奇心が起こり、その場所から逃げる代わりに、彼女はへびが語ることに耳を傾けた。それがへびを媒介として用いている墮落した敵に違いないということが、彼女の思いには起こらなかった。話したのはへびではなく、サタンであった。エバはだまされ、へつらわれ、惑わされた。彼女は、天使のような姿をして天使と同じように見える、威厳のある人に会ったのであれば、警戒したことであろう。しかし、その聞きなれない声を聞いて、彼女はなぜ別のものがこのように気安く自分に話しかけるかを尋ねるために、自分の夫の許へ急いで戻るべきであった。しかし彼女はへびと論じ始める。彼女は彼の質問に答える。(預言の霊 1 卷 36)

1月12日

## 欺瞞的な戦略を避ける

「悪をたくらむ者の心には欺きがあり、善をはかる人には喜びがある。」(箴言 12:20)

エバがこの誘惑者と言葉をかわしさえしなかったら、彼女は安全であっただろう。だが彼女は、サタンにかかわり合ったために、彼の策略に落ちてしまった。今でも多くの者が打ち負かされるのは、このようにしてである。彼らは、神のご要求について疑いを抱き、議論する。彼らは、神のご命令に従わないで人間の説を受け入れるが、それは、偽装されたサタンの策略にすぎない。(各時代の大争闘下巻 278)

サタンは大欺瞞者である。わたしたちにとって彼の誘惑を受け入れることは、実現しようどんな地上の損失よりも、しかり、死そのものよりも悪い。サタンの意志と計画への服従という恐るべき代価を払って成功を得る者は、自分が損害を与える取引をしたことに気づく。サタンとの取引は、何であつても高い代価を払うことになる。彼の示す利益は、幻覚である。彼が差し出す高い希望は、立派で気高く純潔なものを失うことによって手に入る。サタンを常に「と書いてある」というみ言葉によって打ち負かしなさい。「すべて主をおそれ、主の道に歩む者はさいわいである。あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう」(マタイ 4:4; 詩篇 128:1, 2)。

義の働きを行う用意のできている者は、敵の誘惑によって欺かれることはない。彼の行動は正しいという感覚で導かれ、善悪の区別、真理、高められた真理と誤りの区別をすることができる。天の王国に入る者は、道徳的な義務の最高の基準に到達している者、真理を隠し、欺こうとしていない者、彼らによって神が高められ、そのみ言葉が擁護されている者、彼らのうちにある原則が、サタンのたくらみの正当性を立証するために誤用されていない者である。主の贖われた者のために敷かれた道は、すべての世的な計画や実行のはるか上にある。その中を歩く者は自分たちの原則の清らかさを働きによって示すべきである。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1909 年 2 月 24 日)

## 神が仰せになったことの内に留まる

「女はへびに言った、『わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました。』」（創世記 3:2, 3）

エバは神のご命令の言葉に付け加えた。神はアダムとエバに「しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」と仰せになっていた（創世記 2:17）。サタンとのエバの論争の中で、彼女は、「これに触れるな」を付け加えた。ここでサタンの狡猾さがあらわれた。エバのこの言葉は彼を有利にした。彼はその果物をもぎ取ってエバの手に置き、彼女自身の言葉を用いて、次のように言った。もしあなたがそれに触れるなら、あなたは死ぬとこのお方は仰せになった。あなたが見ているように、その実を触っても何の害も受けていないのだから、それを食べても何の害も受けないであろうと。（コンポジション 14）

わたしたちの熱心な兄弟のだれも……主の前に出て、主が彼らになすよう命じておられないテストを作るような危険を冒さないようにしなさい。（伝道 374）

わたしたちはパリサイ人の律法のような律法を作らないよう、あるいは人の戒めを教理として教えないよう注意すべきである。（医療伝道 284）

神は、人への大いなる愛のうちに、彼の行為を指図する律法をお与えになった。それによって、彼がこの地上においてさえ、自分自身の本当の幸福と人類同胞の真の幸福を増し加えるような傾向を持つ事柄をするよう律せられるためであった。日々の生活の中で実行される戒めの原則は、心と思いを気高く、聖化し、イエス・キリストを通して人を聖天使との交わりに、道徳的にふさわしいものとする。全く賢明であられるわたしたちの天父は、人を罪から守り、彼の生涯を整えて、天にふさわしい臣民にする徳を実践するよう導くのにどの規則が要求されるかをご存じであった。（サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1878 年 7 月 18 日）

主は、その大いなる憐れみのうちに、聖なる生活のご自分の規則、ご自分の戒め、ご自分の律法を聖書でわたしたちに表してこられた。このお方はその中で罪を遠ざけるようにと仰せになる。わたしたちに救いの計画を説明し、天への道をお示しになる。（クリスチャン教育 188）

1月14日

## 世界の最古のうそ

「へびは女に言った、『あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです。』」（創世記 3:4, 5）

〔創世記 3:4, 5 参照〕。ここで偽りの父は神の表されたみ言葉への直接の反論を主張した。サタンはエバに、彼女は創造された不死の人であり、死の可能性はないと保証した。もし彼女とその夫が知識の木の実を食べると、彼らの悟りが啓発され、広がり、高尚になり、彼らを神ご自身と同じにすることを、神は知っておられると言った。そしてへびは、エバに答えて、彼らに知識の木の実を食べることを禁じた神の命令は、彼らが知識、すなわち力を得ることがないように、このような従属的な状態にとどめておくために与えられたのだと言った。この木の実実は彼らを賢くするには園の他のどの木よりも望ましく、彼らを神と同等へと高めると、彼は彼女に保証した。全ての木の中でおいしい風味と元気にさせる感化力にとって最も望ましいその木の実を神はあなたに与えることを拒んでおられると、へびは言った。

へびの言うことは非常に賢く、神の禁止令は不公平であるとエバは考えた。彼女は非常においしそうに見える果物がたわわになっている木をあこがれに満ちた願いをもって見上げた。へびは明らかに喜んでそれを食べていた。彼女は、神が自分に完全に食べる権利を与えておられる他のどの果物にもましてこの果物を切望した。（対決 13,14）

律法の主張が示されるとき、人は、神がご自分の教訓を破ることに對して彼らを罰しないようにとはつきり述べつつ、不服従を続けるための言い訳を工夫し始める。それをまじめに考えよう。神はわたしたちの都合に合わせるためにご自分の聖なる律法を変更なさるであろうか？このお方は罪を是認し、不服従を黙認なさるであろうか？もし神がこの種の品性を持っておられるなら、わたしたちはこのお方を敬うことはできない。このお方の權威を尊重することはできない。神の律法へのどの違反も違反者への罰が訪れる。罪の支払う報酬は死である。神はご自分の律法の誉を大切に守られる。それは天と地におけるこのお方の統治の基礎である。（ビュー・アンド・ハルド 1890 年 11 月 18 日）

## エデンにおける悲劇

「女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。」(創世記 3:6)

天使たちは、サタンについて彼らに警告し、この墮落した敵に出会うといけな  
いから、仕事をしているときに、互いに離れてはならないと注意した。天使たち  
は、また、神が彼らにお与えになった指示に厳密に従うように命じた。というのは、  
完全に服従するときのみ、彼らは安全であったからである。……

彼女の第一の誤りは、夫から離れたことであった。次に、禁じられた木のあ  
たりをさまよい、さらに、誘惑者の声に耳を傾けて、「それを取って食べると、き  
っと死ぬであろう」と神が言われたことをあえて疑った。彼女は、神が、その言  
葉どおりのことを意味してはおられまいと考えて、思い切って手をのばして、その  
実を取って食べた。それは、見た目に美しく、食べるのにおいしいものであった。  
彼女は、神が、実際は彼女のためになるものを禁じられたのだと邪推した。そし  
て、彼女は、その実を彼女の夫に差し出して、彼を誘惑したのである。彼女は、  
へびが言ったことをみなアダムに告げ、へびが語る力をもっていたことに対する驚  
きを表した。……

アダムは、これこそ警告されていた敵にちがいない、妻は死ななければならな  
いと感じた。彼らは別れなければならない。エバに対するアダムの愛は強かった。  
すっかり落胆してしまったアダムは、エバと運命を共にする覚悟をきめた。彼は木  
の実をつかんですばやく食べた。サタンは狂喜した。彼は天において反逆を起こし、  
彼を愛し彼の反逆に参加した共鳴者たちを得ていた。彼は、墮落し、他の者をも  
彼と共に墮落させていた。そして今、彼は、女を誘惑して神に対する不信を抱かせ、  
神の知恵をさぐって、全知であられる神の計画をきわめさせようとしたのであった。  
サタンは、女がただひとりで墮落するのではないことを知っていた。エバを愛する  
あまりに、アダムも神の戒めにそむき、彼女とともに墮落したのであった。

人類が墮落したという知らせは、全天にひろがった。琴は全部鳴りをひそめた。  
天使たちは悲しみのあまり、頭の冠を脱ぎすてた。(初代文集 257-259)



1月16日

## エデンからの警告

「よしまな者の道に、はいってはいらない、悪しき者の道を歩んではいけない。それを避けよ、通ってはいらない、それを離れて進め。」(箴言 4:14, 15)

サタンは、善と悪のまじった知識は祝福となるものだとか、あるいは神がこの木の実をとることを禁じておられるのは、結局、大きな幸福を与えることをひかえておられるのだというようなことを、エバに思わせようと望んだ。サタンは、神がこの果実を食べることを禁じておられるのは、この果実が知恵と能力をあたえる不思議な性質をもっているからであって、神はこのようにして、彼らがいつそう高い進歩をとげ、もっと大きな幸福を見いだすことのないようにしておられるのであると力説した。彼は、自分も禁断の実を食べた結果、話ができるようになったのであるから、もしエバたちもこの果実を食べたら、もっと高い境地に達し、もっと広い知識の分野に入るであろうと言明した。

サタンは、自分が禁断の木の実を食べたために、非常な恩恵を受けたと主張しながら、一方には、神にそむいたために、天より追われた身であることをかくしていた。欺かれ、おだてられ、迷わされたエバが、その欺瞞をみわけることができなかつたほど巧妙に、真理の仮面の下に偽りがかくされていた。彼女は、神が禁じているものをほしがり、神の知恵を疑い、知識のかぎである信仰を捨ててしまった。……

「あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となる」(創世記 3:5) とサタンは言った。果たして彼らの目は開いたが、しかしそれは何という悲しい結果をもたらしたことであろう。神の戒めにそむいた彼らが得たものは、悪の知識と罪ののろいだけであった。果実そのものには何の害毒もなかった。また、ただ食欲に負けたことだけが罪というわけではなかった。アダムとエバが神の戒めにそむく者となり、この世に悪の知識をもたらしたのは、彼らが神の恵みを疑い、神のみ言葉を信じないで、神の権威を否定したからであった。それはまた、あらゆる種類の偽りや誤りに対して門を開いた。

神だけが全知であり真理であるにもかかわらず、アダムはその神のみ言葉に従わず、欺く者に聞き従ったために、いっさいのものを失ってしまった。(教育 15)



## 窮屈で不適切な衣服

「すると、〔アダムとエバ〕ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。」(創世記 3:7)

アダムとエバはどちらもその実を食べ、彼らが神に従っていれば、決して得ることのなかったはずの知識—神への不服従と不忠実における経験—自分たちが裸であるという知識を得た。純潔な衣、すなわち彼らを取り巻いていた神からの覆いが離れ去ったので、彼らはこの天来の衣の代わりにいちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。

これは、神の律法の違反者が、アダムとエバの不服従の日以来、用いてきた覆いである。彼らは違反によってもたらされた自分たちの裸を覆うためにいちじくの葉をつづり合わせた。いちじくの葉は不服従を覆うために用いられる議論を表している。主が男女の注意を真理に引きつけると、その魂の裸を隠すためにいちじくの葉をつづり合わせることが始まる。しかし罪人の裸は覆われない。このみえすいた働きに関心のあるすべての者によってつなぎ合わされた議論はすべて失敗に終わる。

主イエス・キリストは覆い、ご自身の義の衣を備えておられるが、それは悔い改め信仰によってそれを受け入れるどの魂にも着せてくださるためである。……罪は律法の違反である。しかしキリストは、一人ひとりが自分の罪を取り除いていただくことができるために死なれた。いちじくの葉の覆いはわたしたちの裸を覆うことは決してない。罪は取り除かれなければならない。キリストの義の衣が神の律法の違反者を覆わなければならない。主が信じる罪人をご覧になるとき、このお方は彼を覆っているいちじくの葉ではなく、エホバの律法への完全な従順であるご自身の義の衣をご覧になる。(ビュー・アンド・ヘルド 1898年11月15日)

警告を受け取りなさい。あなたの尊い猶予の期間を、罪の結果である裸を覆うためにいちじくの葉をつづり合わせるために充ててはならない。(原稿リ-ス 21巻 194)

1月18日

## 隠しても無駄である

「人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。」(創世記 3:8)

主はアダムとエバが禁じられた木の実を食べたのをご覧になった。彼らは罪悪感でこのお方のみ前から逃げ、身を隠したが、神は彼らをご覧になり、彼らの恥をこのお方の目から覆うことはできなかった。(レビュー・アンド・ヘラルド 1888 年 3 月 27 日)

アダムとエバは禁じられた実を食べることは非常にささいなことであり、神が宣言なさったほど恐ろしい結果をもたらすはずはないと信じた。しかしこの小さなことは罪であり、神の不変の聖なる律法の違反であった。そしてそれはわたしたちの世に死と数え切れないほどの苦悩の水門を開いた。各時代にわたり地から嘆きの叫びが絶え間なく上っており、人の不服従の結果として万物が共に痛みでうめき、苦勞している。天そのものが神への人の反抗の結果を感じている。カルバリーは、神の律法の違反への怒りを静めるものとして要求された驚くべき犠牲の記念碑として立っている。罪をささいなこととして考えないようにしよう。無限の神の御子の手と足とわき腹は、言い表せない深い恨みとのろいの証を宇宙の前に担うべきではないであろうか。

ああ、老若の思いに罪の非常な罪深さに関する正しい印象が与えられるように! ああ、全ての者が神への攻撃と人類に対するその無礼を正しく認識することができると良いのに! 真理のみ言葉は「その罪は必ず身に及ぶ」と宣言する(民数記 32:23)。あなたの生涯の一つ一つの行為の真の性質が知られるようになる。この世においてすら神のみ摂理によって、なにか予期しない状況があなたの悪い秘密の行為を暴露するかもしれない。しかしたとえあなたが自分の真の品性を人々の目から隠すことに成功したとしても、自分の罪を悔い改めず、わたしたちが生きることができるために死んでくださったキリストの力によって全ての悪と縁を断つことをしないどの魂のためにも運命づけられている、発覚の必ず起る日がある。……「神はすべてのわざ、……を……さばかれるからである」(伝道の書 12:14)。(同上 1888 年 3 月 27 日)

## 恥じ、わなにかかる

「主なる神は人に呼びかけて言われた、『あなたはどこにいるのか』。彼は答えた、『園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです』。」(創世記 3:9, 10)

アダムとエバが禁じられた実を食べた後、彼らは恥と恐怖の意識に満たされた。初め彼らの唯一の考えは、神の御前に自分たちの罪をどのように言い訳し、案じられる死の判決をどのように逃れるかであった。(教会への証 5 巻 637)

彼らが罪なく清いときであれば、喜んで創造主の近づいて来られるのを歓迎するのであったが、いまは、恐れて逃げ、園の奥深いところに隠れようとした。(人類のあけぼの上巻 46)

サタンは、わたしたちの最初の両親の墮落をなしとげた。そしてこの時から現在に至るまで、人間の野望を満足させること、また利己的な希望や願望にふけることは、人類の滅びであることが立証された。アダムは神のもとで、天の家族の原則を維持するために地上の家族のかしらとして立つべきであり、これは平安と幸福をもたらすはずであった。しかし、だれも「自分のために生き」ないという律法に、サタンは反対すると決心していた。彼は自己のために生きようと願い、自分を感化力の中心にしようとした。天で反逆を起こさせたのがこれであり、地上に罪をもたらしたのは、この原則を人が受け入れることによってであった。アダムが罪を犯したとき、人は天が任命された中心と関係を絶って、悪魔が世界の中心をなす力となった。神の御座があるはずのところにサタンは自分の王座を据えた。世はその敬意を心からの捧げものとして敵の足元に置いた。

神の律法への違反はその結果として悲哀と死をもたらした。人の力は不服従によって正道からはずれ、利己心が愛に取って代わった。彼の性質は非常に弱まり、悪の力に抵抗することは不可能になった。そして誘惑者は人を創造する神の計画を妨げる目的が果たされつつあるのを見た。……人々は自分たちを彼の車に捕虜としてつなぐ支配者を選んだ。(ビュー・アノド・ヘラルド 1913 年 1 月 16 日)

1月20日

## 自分以外のだれでも非難する

「神は〔アダムに〕言われた、『あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか。食べるなど、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか。』人は答えた、『わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです。』」（創世記 3:11,12）

アダムは、自分の罪を否定し、言いわけをすることもできなかった。彼は、悔い改めの精神をあらわす代わりに、彼の妻を非難し、ひいては、神ご自身の責任にした。「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」（創世記 3:12）。エバを愛するがために、神に喜ばれることも、樂園の彼の家も歓喜に満ちた永遠の命をも捨てた彼が、罪を犯した今は、罪の責任を妻ばかりでなく、創造主ご自身にまで負わせようとした。罪の力は、これほどに恐ろしいのである。女が「あなたは、なんということをしたのです」と問われたとき、彼女は、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」と答えた（創世記 3:13）。「どうしてあなたは、へびをお造りになったのですか。

へびがエデンにはいるのをどうしてお許しになったのですか」という質問が彼女の言いわけの真意であつた。このようにして、彼女もアダムと同じく、彼らの墮落の責任を神のせいにした。自己を義とする精神は、偽りの父から始まった。この精神は、われわれの祖先がサタンの力に屈服すると直ちにあらわれた。そして、それ以来、アダムのすべてのむすこ、娘はこの精神をあらわしてきた。けんそんに自分の罪を告白するかわりに、彼らは他の人や、環境、あるいは神を非難して、自分を弁護しようとする。（人類のあけぼの上巻 46,47）

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもない。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目である。であるから、その人の告白はまじめでもなければ熱心でもない。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言う。……

真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのである。（キリストへの道 49-51）

## 必要とされた贖い代—そして見出された！

「もしそこに彼のためにひとりの天使があり、千のうちのひとりであって、仲保となり、人にその正しい道を示すならば、神は彼をあわれんで言われる、『彼を救って、墓に下ることを免れさせよ、わたしはすでにあがないしろを得た。』」（ヨブ 33:23, 24)

人類が失われ、神の創造なされた世界が不幸と病氣と死の運命を背負った人間によって満たされ、罪びとにとつてのがれる道のないことがわかったとき、天は悲しみに満たされた。アダムの子孫は死なねばならない。わたしは美しいイエスのお姿を見、その顔つきに同情と悲しみの表情をみとめた。まもなくわたしは、イエスが、天父をつつんでいる非常に輝かしい光に近づかれるのを見た。わたしにつきそっていた天使は、イエスが天父と親しく語っておいでになると言った。イエスが天父とお話しになっている間、天使たちは心配で緊張しているようにみえた。イエスのお姿は、天父のまわりの輝く光の中に、三度見えなくなった。三度目に、天父のところから出てこられるイエスのお姿がみられた。イエスの顔つきは落ちついて、困惑や疑いの影は少しもみられず、言いあらわしようのない慈愛に満ちていた。その時イエスは、失われた人類のためにのがれの道が備えられたことを天使の万軍にお知らせになった。イエスは、ご自分の生命を身代金として提供し、死の宣告をご自身に引きうけたいと天父に嘆願なされたことを語られた。それは、イエスを通して人類が罪のゆるしを得、イエスの血の功績を通し、また神の律法に従うことによって神の恩恵をあたえられ、美しい園へつれて行かれて生命の木の実を食べることができるようになるためだった。

最初天使たちはよろこぶことができなかった。というのは、イエスが彼らに何一つかきさないで、救いの計画をうち明けたもうたからだ。イエスは、ご自分が天父の怒りと罪を犯した人類との間に立たれることや、ご自分が不義とあざけりを一身に負われても、彼を神のみ子として受け入れる者は少ないことなどを、天使たちにお語りになった。（初代文集 260, 261）

〔天使は言った〕「罪の人類を滅ぼすか、それとも人類のために愛し子を死なせるかということは、天の神にとっても戦いでした」と。（初代文集 264）

1月22日

## なんという大きな代価！

「あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。キリストは、天地が造られる前から、あらかじめ知られていたのであるが、この終りの時に至って、あなたがたのために現れたのである。」（ペテロ第一 1:18-20）

〔イエスはあらかじめ、御使たちに次を語られた。〕イエスは、天の一切の栄光を捨てて、この地上に人としてあらわれ、人として身をいやしくし、人の受けるすべての誘惑を自らの経験を通して知り、どうしたら試みられる人々を救助することができかを知られるのである。そして最後に、教師としてのイエスの使命が達成されてからは、人の手に渡され、サタンと悪天使たちが悪人たちをそそのかして、苦しめることのできるかぎりのあらゆる残虐と苦難を加えるのを忍び、最も残酷な死に方によって、不義な罪びととして天と地との間にかけられ、天使たちすら目をそむけ、顔をおおうような恐るべき苦悶にあわれるのである。イエスは肉体的な苦痛を経験されるばかりでなく、それとは比べものにならないほどの精神的な苦痛を味わわれる。全世界の罪の重荷が彼の上にのしかかるのである。イエスは、ご自分が死んで三日目にふたたび甦えり、わがままで不義な人類の執り成しをするために、天父のもとに昇天されるということをお語りになった。

天使たちはキリストの前にひれ伏した。彼らは自分たちの生命を捧げたいと申し出た。イエスは、天使の生命では負債を払うことができないから、自分が死んで多くの人を救うのだと仰せになった。キリストの生命だけが、人類の身代金として天父に認められるのである。（初代文集 261,262）

これほどの愛と謙遜の対象として、わたしたちはどれほど贖いの神秘を感謝すべきであろうか。最も魅力的なかたちで示された世の壮麗さは、この偉大なへりくだりの前に無意味なものとして沈むべきである。キリストに真に従う者はこのお方のために喜んで苦しむべきである。彼らがこの神秘を熟考するとき、心は優しい愛、生き生きとした献身で満たされる。彼らは、よい働きをしながら巡回されたお方、また罪の退廃からわたしたちを贖うためにご自分の命を進んで与えてくださったお方の模範に従わなければならないと感じる。（ビュー・アノド・ヘルト 1909年7月15日）

## 救うために苦しむ

「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日目によみがえる。」(ルカ 9:12)

イエスは、天使たちにも果たさねばならない役割があることをお語りになった。すなわち、彼らはイエスと一緒にいて、幾度かイエスを力づけるのである。イエスは人間の墮落した性情をとられるので、その力は天使たちに匹敵することさえできない。天使たちが、イエスの屈従や大きな苦難の目撃者となり、イエスの苦難や彼に対する人々の憎悪を目に見るときに、彼らは、魂の奥底までゆり動かされ、イエスを愛するあまり、彼を殺害者の手から救い出そうと思うのだが、手出しをして目の前に起こるどんな事柄も妨げてはならないのである。天使たちはまた、キリストのよみがえりにあたって、一つの役割を演じなければならない。……

イエスは、聖なる悲しみの中にも、天使たちを慰めはげまし、今後は彼のあがないたもう人々が彼とともにいることや、彼はご自分の死によって多くの者をあがない、死の権力をもっている者を滅ぼしたもうことなどをお知らせになった。そのとき天父は、王国と、全天における王国の尊厳をキリストにあたえ、彼はそれを永遠に保ちたもうのである。サタンと罪びとは滅ぼされ、天やきよめられた新しい地を、もう決して妨害するようなことはなくなる。イエスは、天父の承知したもうたこの計画に天使たちが同意し、墮落した人類が、彼の死により、ふたたび高められて、神の恩恵にあずかり、天にうけ入れられることをよろこぶようにとお命じになった。

そのとき、言いあらわしようのないよろこびが天を満たした。天使たちは、賛美と崇敬の歌をうたった。彼らは、神が、反逆した人類のために愛し子を死なせたもう、その大きないつくしみとへりくだりのゆえに、立琴をかきならして、これまでよりも一段と高い調べをかなでた。イエスが、天父のひざもとを離れることを承知し、苦難と苦悶の一生をえらび、屈辱的な死を通して、人に生命をあたえたもうその克己と犠牲に対して、賛美と崇拜がわき起こった。(初代文集 262, 263)



1月24日

## 象徴における約束

「主なる神はへびに言われた、『おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最ものろわれる。おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであろう。わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう』。」（創世記 3:14, 15）

〔創世記 3:15 引用〕とサタンに言われた宣告は、われわれの最初の両親にとって、キリストを通してなされるあがないの、約束であった。（患難から栄光へ上巻 238）

だが、神の支配と統治の中でこのお方に任命された原則を、サタンの計画をくじくためにもたらし、世界をその忠誠に連れ戻すことができるであろうか。神は仰せになった、わたしは御子をつかわす。〔ヨハネ 3:16 引用〕。これは罪のための救済策である。キリストは仰せになる。「サタンが彼の王座を置いたところに、わたしの十字架は立つ。サタンは追い払われ、わたしは全ての人をわたしに引き寄せるために上げられる。わたしは贖われた世界の中心となる。主なる神が高められる。今人間の野望、人間の情欲に支配されている者がわたしのための働き人になる。悪い感化力は全ての善に対抗するために陰謀をたくらんできた。彼らはエホバの律法に反対するために、人々にそれを正しいと考えさせようと共謀してきた。しかし、わたしの軍勢は闘争においてサタンの勢力に対抗する。わたしの霊が彼らに対抗するために天のすべての代理者と団結する。わたしはすべての聖化された人間の代理者を宇宙に投入する。わたしの代理者は一人として欠けるべきではない。わたしは、わたしを愛するすべての者のための働きを持っており、わたしの指示の下で働くどの魂のためにも仕事を持っている。サタンの軍勢の活動、人の魂を取り巻く危険はどの働き人のエネルギーをも必要とする。しかし強制はされない。人の悪行は、神の愛、辛抱強さ、長い忍耐によって対応すべきである。わたしの働きはサタンの支配の下にいる者を助けるものとなる。

神は、キリストを通して、人を創造主との初めの関係に連れ戻し、サタンによって持ち込まれたまとまりを欠く感化力を正すために働かれる。（教会への証 6巻 236）



## 欺いてくびきにつなぐ

「ただ恐れるのは、エバがへびの悪巧みで誘惑されたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する純情と貞操とを失いはしないかということである。」  
(コリント第二 11:3)

エバはへびにだまされ、神はご自分が仰せになったようにはなさらないと信じ込まされた。……へびは彼女が死ぬことはないと言った。そして彼女は実を食べて、死ぬに違いないと思われるような悪い結果を何も感じなかった。しかし、その代わりに、楽しい感覚があり、彼女はきっと天使が感じているものだろうと想像した。彼女の経験はエホバの明確な命令に真っ向から逆らうものであったが、アダムはそれによって誘惑されるままに屈した。

わたしたちはしばしばこのようなことを、宗教界においてすら見出す。神のはっきりとした命令が破られる。そして「悪しきわざに対する判決がすみやかに行われないために、人の子らの心はもっぱら悪を行うことに傾いている」(伝道の書 8:11)。神の最も明確な命令を目の前にしながら、男女は自分自身の傾向に従い、その後であつかましくもこのことに関して、神のはっきりとしたみ旨に逆らって行くことを許してくださるよう神を説得するために祈るのである。サタンはそのような者のそばに来て、エデンでエバにしたように、彼らに印象を与える。彼らの思いが働き、彼らはこれを主が彼らに与えて下さった最も素晴らしい経験として理解する。しかし真の経験は、自然の法則、神の法則と調和している。偽りの経験は、命の法則とエホバの教訓にこぞって反対する。(健康への勧告 108, 109)

[サタンは]、彼らが人間の領域を超えて高められるべきであると、エバをおだてて信じるようにさせた。しかしキリストは、ご自分がわたしたちの前に置かれた模範によって、人類家族が自分たちの人間の領域で神の御言に従いつつ、人となることができるように励まされる。このお方ご自身がサタンの属性を取るためではなく、神のご品性の写しであるその律法への従順と道徳力のうちに人となられた。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1897 年 10 月 14 日)

キリストだけが利己心の世で汚れのないままお立ちになった。そこでは人々はサタンによって自分たちの手に置かれた計画を成し遂げるために、友あるいは兄弟を破滅させるのである。……利己心という騒音のただなかで、このお方は人々に仰せになることができる。あなたの中心―神に帰りなさい。(教会への証 6 巻 237)

1月26日

## 野望によって落とされる

「女に言われた、『わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。それでもなお、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう。』」  
(創世記 3:16)

神は創造のときに、〔エバ〕をアダムと等しいものに造られた。もし彼らが神に従って、その偉大な戒めに調和していたならば、彼らは、互いに調和しあってきたはずであった。しかし、罪が調和を破った。だから、一方が他方に従属することによって彼らの一致と調和が保たれるようになった。エバは最初に罪を犯した。彼女は、神の命令に反して、夫のそばを離れたために、誘惑に陥った。また、アダムは、彼女のすすめによって罪を犯した。そこで、彼女は、夫に従う立場におかれた。神の律法が命じているこの原則を、墮落した人類が守っていたならば、この宣告は、罪の結果によるものであったとは言え、彼らにとって、祝福となったことであろう。ところが、こうして与えられた優位を男が乱用したために、女の運命は非常に苦しく、彼女の人生は重荷となった。

エバは、エデンの家庭で、夫のそばにいて、完全な幸福を味わっていた。しかし、落ちつきを失った現代のエバたちと同様に、彼女は、神がお定めになったところより、もっと高い身分になりたいと望むようにそそのかされた。彼女は、初めに置かれた地位より高く昇ろうとして、それよりはるか下に落ちた。神のご計画に従って、実生活の義務を快く果たそうとしない者は、みな同様になる。神がお与えにならなかった地位を得ようと努めて彼らが祝福となることのできる場所をあけるものが多い。高い身分を望んで、女性の尊厳と品性の気高さを犠牲にし、天が特に彼らに与えた働きを怠る者が多いのである。(人類のあけぼの上巻 47, 48)

天の王の娘たち、王家の家族は、より気高い生き方に到達する責任の重荷を感じるが、それは彼らが天との密接な交わりに入れていただくことができるためである。……〔彼らは〕この終わりの時代に女性の思いと愛着を吸い込む流行と愚行に満足しない。(教会への証 3 巻 484)

## 呪われた地にもかかわらず希望がある

「〔神は〕人に言われた、『あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。』（創世記 3:17）」

かつては神のご品性、すなわち善の知識だけが書かれていたところに、今はそれと共にサタンの品性である悪の知識が書きしるされている。いまや善と悪の知識を表わしている自然から、人は、罪の結果に対する警告を絶えず受けなければならなかった。

しばむ花に、散る木の葉に、アダムと妻は、衰えというもののきざしを初めてまのあたりに見た。すべての生物はやがて死ななければならないというきびしい事実が、彼らの心にはつきり迫ってきた。彼らの生命をささえている空気にさえ、死の種がひそんでいた。

彼らはまた自分たちの失った支配権をたえず心に思い出した。人間よりも下級な被造物の中にあつて、アダムは王としての立場にあつた。彼が神に忠誠心を保っていた間は、自然界の万物は、彼の統治に従っていた。しかし彼が神の戒めにそむいたときに、この統治権は失われた。アダム自身によってこの世界にもたらされた反抗心は、動物界にまでひろがった。……

〔しかし〕彼らは、自分たちが経験しなければならないいばらやあざみのことや、労苦や悲哀のことや、土に帰らなければならないことなどを聞く前に、希望を与えずにはおかない約束の言葉をきかされた。サタンに屈服したために失われたすべてのものは、キリストによって再びとりもどされることができるようになった。

自然界もまたこの救済の暗示をわれわれにくりかえしている。自然界は、罪のために傷つけられてはいるものの、いぜんとしてそれは神の創造について語り、また救済について語っているのである。地は衰滅という明らかなしを通して、罪ののろいをあかししているが、しかもなお生命を与える能力を、豊かに美しく表象している。木々はその葉をふるいおとしても、それはもつと新しい緑したたる衣をまとい、花はしばむが、やがてまた新しい美しさに姿を装ってあらわれる。神の創造力の一つ一つの現われには、われわれ人間が、「真の義と聖」の中に、再び新しく創造され得るとの確証が示されている（エペソ 4:24）。（教育 17-19）

1月28日

## エデンからの追放

「そこで主なる神は彼〔アダム〕をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた。」(創世記 3:23, 24)

アダムとエバは神の創造されたみ業から得られ、聖天使の教えによって受け入れるこのお方の知識に完全に満足しているべきであった。しかし彼らが知識を持つべきではないと神が計画されたことを知ってみたいとの好奇心が彼らに起こった。罪に無知であることは彼らの幸福のためであった。彼らが禁じられた実を食べることによって到達すると考えた知識の高い状態は、彼らを罪と罪悪感の墮落へと投げ落した。(対決 15)

人類が墮落したという知らせは、全天にひろがった。琴は全部鳴りをひそめた。天使たちは悲しみのあまり、頭の冠を脱ぎすてた。全天は動揺した。罪を犯したふたりをどう処置したらよいかを決定するために、会議が開かれた。天使たちは、アダムとエバが命の木に手をのばしてその実を食べ、永遠の罪人になりはしないかと恐れた。しかし、神は、罪人たちを園から追放すると言われた。天使たちは、ただちに命の木にいたる道を守るように、命令を受けた。アダムとエバが、神に従わないで、神の不興をこうむったのちも、命の木の実を食べて、罪と不服従をいつまでも続け、罪を永遠に伝えようというのが、サタンのだくらんだ計画だった。しかし、聖天使たちが、命の木にいたる道をさえぎるためにつかわされた。これらの力強い天使たちは、おのおのその右手に輝く剣のようなものを持っていた。

こうしてサタンは勝利を収めた。彼は、自分の墮落によって、他の者たちを苦しみに陥れた。彼は天から閉め出され、彼らは楽園から閉め出されたのであった。(初代文集 259)

アダムとエバは、悪の知識を選んだ。もし彼らが、その失った地位を回復しようとするれば、それは、彼らが自ら招いた不利な事情の下に回復されなければならなかった。(教育 17)

## 神の大いなる憐れみのしるし

「主なる神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた。」(創世記 3:21)

へりくだりと言い表せない悲しみのうちに、アダムとエバは神の戒めに不従順になるまでは非常に幸福であった美しい園を離れた。環境が変わり、罪を犯す前と同じではなくなった。神は彼らがさらされた肌寒さの感覚、その後、暑さの感覚から守るために、皮の着物を彼らに着せられた。

神の御使たちはこの墮落した夫婦を訪問し、彼らに、神の律法への違反のゆえに、これ以上彼らの聖なる地所、エデンの家庭を所有し続けることはできないが、彼らの場合は全く希望がないわけではないことを告げるのを委ねられた。神の御子は彼らの希望のない状態をご覧になって、あわれみに動かされ、彼らに当然与えられるべき罰をご自身に引き受け、キリストが提案なさる贖罪のうちに信仰によって彼らが生きることができるために、彼らのために自発的に死んでくださるのであった。希望の扉が開かれ、人はその大きな罪にもかかわらず、サタンの完全な支配下にいなくてもよいのである。人に恩恵期間が与えられた。それは、その期間の間に、悔い改めと神の御子の贖罪を信じる信仰の生活によって、彼が御父の律法の違反から贖われることができ、このようにして、その律法を守るための努力が受け入れられる立場にまで高められるためであった。

天使たちは、彼らが神の律法に違反し、それによってキリストがご自身の尊い命を大いなる犠牲にするという手段を取ることになったことが知らされたとき、天で感じられた悲しみを彼らに語った。

アダムとエバが、神の律法がどれほど高められた聖なるものであるか、その違反が彼らを完全な滅びから救うためにそれほどまでに高価な犠牲を必要とするものであることを悟ったとき、彼らは、愛する神の御子がこの大きな犠牲を払うよりは、自分たちと後世の者が自分たちの違反の刑罰を負うようにしてほしいと嘆願した。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1879 年 1 月 30 日)

1月30日

## なんと驚くべきへりくだり

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。」(ヨハネ 1:14)

人のためのキリストのへりくだりは天使たちにとって驚くべきことであった。キリストを通じての贖罪は彼らにとって愛と知恵の神秘であり、創造のみ業よりも彼らの関心を奪った。それほど愛は彼らを驚嘆させ、有頂天にさせた。それが非常に熱烈で無類の利己心の全くないものであったので、彼らはそれを理解することができなかった。初めに人の創造、天と地の構成、創造主が自然界全てを装われた美と栄光は、全天の驚きと感嘆、彼らの崇敬と愛を呼び起こした。しかし御座をベツレヘムの馬ぶねと取り替え、ご自身をあざけりと侮辱、貧困と残酷な死にさらす彼らの司令官のこのへりくだりは、輝く天の万軍から最高の熱愛と最も深い喜びを奮い起こした。彼らの喜びと賛美は、ベツレヘムの丘で羊飼いの知らせでほとぼり出た。……

示し、魅了され、心を奪われ、最も深い喜びに満たされるべき者が心を動かされず、感動しなかった。この無関心は今日神に公に反抗する者だけでなく、キリストに従っていると公言するものの中にはっきりみえる。この人々はもっと大きい有罪判決を受ける。なぜならキリストは、このお方のみ旨に公然と反抗して立つ者によってよりも、み名を公言しながら、働きにおいてこのお方を否定する者によってはるかにもっと辱められるからである。キリストは、罪人の罪深い生活によって恥をこうむるよりも、生活が慎重でなく自分たちの公言する真理によって聖化されていない自称クリスチャンによって、さらに恥をこうむるのである。(ビュー・アンド・ワールド 1909 年 7 月 15 日)

わたしたちに示されてきた偉大で広大な真理がもっと多くを成し遂げない理由は、わたしたちがこの真理を生きないからである。それゆえそれらはわたしたちを感化する力がない。わたしたちは真理をもっと深く感謝する必要がある。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1900 年 5 月 2 日)

## 暗闇に輝く光線

「〔イエスは〕おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。(マタイ 1:21)

エデンにおけるアダムの違反の後、神がわたしたちにお与えになったキリストは、わたしたちが自分の罪のうちに救われるのではなく、わたしたちの罪から救っていただけのためであったが、それはわたしたちが神への忠誠に立ち返り、従順な子となるためであった。わたしたちが神の支配する御霊に自分の思い、魂、体、自分の全てを委ねるとき、そのとき真理の御霊はわたしたちと共におられる。

……

神が、〔破られた〕神の律法の罰に苦しむために、わたしたちのために死ぬようと、ご自分のひとり子を与えてくださったのは本当である。わたしたちはこのことをよく考え、熟考すべきである。そして墮落し始め、このお方を良く知るようになり、このお方の知識を持ち、イエス・キリストがわたしたちの世界に来られたとき、このお方がどのようにご自分の王衣と王冠を脇へ置き、その神性に人性をまとわれたかを知る知識を持つ。なぜならこのお方は、ご自分の貧しさによってわたしたちが富むものとなることができるために貧しくなられたからである。御父が御子をここにつかわされた。そして宇宙のこの小さな原子であるまさにこの世界で、人類がかつて知った中で最も壮大な光景が繰り広げられた。……

神は世にどのように正しくあらわされるべきであったか。このお方が愛の神、憐れみ、親切、哀れみに満ちたお方であることがどのように知られるべきであったか、世はこのことをどのように知るべきであったか、神が御子をお送りになった、そしてこのお方は神のご品性を世にあらわすべきであった。

サタンはちょうど神と人の間に入り込み、自分自身を置いた。人間の思いを脇へそらすのが彼の働きであり、神とわたしたちの世界にある道徳的暗闇、墮落、不法全体との間をわたしたちが識別できないように、自分の暗い影をわたしたちの道に投げかける。キリストは天におられ、天の光をもたらし、暗闇を追い返し、ご自身の栄光の日光を入れてくださる。そのときわたしたちは墮落と汚染と汚れのただなかに天の光を見る。(エレン・G. ホワイト 1888 年原稿 74, 75)



## キリストと律法 (VII)



## 律法におけるキリストの義

パウロが直面しなければならなかった最大の困難は、ユダヤ人化した教師たちの感化力から生じた。これらの人々は、コリントにおける教会で不和を引き起こすことにより、パウロを大いに悩ませた。彼らは絶えず、律法の儀式的徳を提示し続けていた。これらの儀式をキリストの福音よりも高く持ち上げては、パウロが新しい改心者たちにそれらを強く勧めなかったといつて責め立てた。

パウロは、彼らの領域で彼らに応じた。「もし石に彫りつけた文字による死の務が栄光のうちに行われ、そのためイスラエルの子らは、モーセの顔の消え去るべき栄光のゆえに、その顔を見つめることができなかつたとすれば、まして靈の務は、はるかに栄光あるものではなからうか。もし罪を宣告する務が栄光あるものだとすれば、義を宣告する務は、はるかに栄光に満ちたものである」(コリント第二 3:7-9)。

シナイ山から恐るべき威厳のうちに語られた神の律法は、罪人にとって有罪を宣告するものだった。刑を宣告するのが、律法の本分であるが、そこには許したり、贖ったりする力はない。それは命に定められている。その規則に調和して歩む人々は、従順の報いを受ける。しかし、律法は、その有罪宣告の下に続ける人々には、くびきと死をもたらす。

律法は非常に聖なるものであり栄光に富んだものであるため、モーセが手には石の板を受けて、神と共にいた聖なる山から戻ってきたときには、彼の顔は人々が苦痛なくして見ることのできない栄光を反射していた。そこで、モーセは自分の顔に覆いをかけることを余儀なくされた。

モーセの顔に輝いた栄光は、律法にあるキリストの義の反射である。律法そ



れ自体には栄光はなく、ただその中にキリストが具現化されているときにのみ栄光がある。律法に救う力はない。律法はそこに義と真理に満ちみちてキリストが表されているので無ければ、光沢はない。

犠牲制度の型と影は、その預言と共に、キリストの啓示によって世にもたらされることになっていた憐れみと恵みの覆われた不明瞭な見解をイスラエル人に与えた。モーセにはキリストを指し示している型と影の意味が明らかにされた。彼はキリストの死の際、本体と型が出会うときに、廃止されるべきものの終結を見た。彼はキリストを通してのみ人が道德律を守ることができるを見た。この律法の違反によって、人は罪をこの世にもたらし、罪と共に死がもたらされた。キリストは人間の罪のための償いの供え物となられた。このお方はご自分のご品性の完全を、人間の罪深さに代わって差し出された。このお方はご自身に不従順ののろいを引き受けられた。犠牲と捧げ物は、将来このお方が払うことになっていた犠牲を指し示していた。ほふられた小羊は、世の罪を取り除く神の小羊を象徴していた。

廃止されることになる対象を見ること、すなわち律法のうちに表されたキリスト、モーセの顔に輝いたものを見ることであった。石に記され彫り刻まれた律法の務は、死の務であった。キリストなしには、違反者はそののろいの下に、希望も許しもなく取り残されていた。務そのものに栄光はないが、礼典律の型と影のうちに表された約束された救い主が、道德律を栄光に輝くものとされたのである。

パウロは、自分の兄弟たちが罪を許される救い主の偉大な栄光が、ユダヤ制度全体に意味を与えたことを認めるように願った。彼は彼らがまたキリストが世に來られ、人の犠牲として死なれたときに、型が本体に合ったことを認めるように願った。

キリストが罪祭として十字架上で死なれたのち、礼典律は何の効力も持ち得なかった。しかしなお、それは道德律につながり、栄光に満ちていた。全体は神性の印が押されており、神の聖潔、正義、義を表現していた。そしてもし廃止されるべき旧約の務が栄光に満ちたものであれば、キリストが現され、ご自分の命を与え聖化する御霊を信じるすべての人に与えて下さるときの現実、どれほどはるかにまさって栄光に満ちているはずだろうか。

十戒の律法の宣布は、神の栄光と威光のすばらしい現われであった。この力の表れは、民にどのように影響を及ぼしたであろうか。彼らは恐れた。彼らが「か

みなりと、いなずまと、ラッパの音と、山の煙っているのを見た」とき、彼らは「恐れおののき、遠く離れて立った。彼らはモーセに言った、『あなたがわたしたちに語ってください。わたしたちは聞き従います。神がわたしたちに語られぬようにしてください。それでなければ、わたしたちは死ぬでしょう。』（出エジプト記 20:18, 19）。彼らはモーセに自分たちの仲保者となることを望んだ。彼らはキリストが定められた仲保者であられること、そしてまたこのお方の仲保が取り除かれるなら、確かに彼らは焼き尽くされてしまうことを理解しなかった。

「モーセは民に言った、『恐れてはならない。神はあなたがたを試みるため、またその恐れをあなたがたの目の前において、あなたがたが罪を犯さないようにするために臨まれたのである』。そこで、民は遠く離れて立ったが、モーセは神のおられる濃い雲に近づいて行った」（出エジプト記 20:20, 21）。

罪の許し、イエス・キリストを信じる信仰による義認は、自分たちの失われた状態、自分たちの有罪と罪のゆえに仲保者を通してのみ神へ近づく。これらの真理について民はほとんど概念をもっていなかった。大部分、彼らは神と神へ近づく唯一の道について知識を失っていた。彼らは何が罪を構成しているか、また何が義を構成しているかについての感覚をほとんどまったく失っていた。キリストを通しての罪の許し、約束されたメシヤ、すなわち彼らの捧げ物が象徴していたお方は、ぼんやりとしか理解されていなかった。

パウロは次のように宣言した、「こうした望みをいだいているので、わたしたちは思いきって大胆に語り、そしてモーセが、消え去っていくものの最後をイスラエルの子らに見られまいとして、顔におおいをかけたようなことはしない。実際、彼らの思いは鈍くなっていた。今日に至るまで、彼らが古い契約を朗読する場合、その同じおおいが取り去られないままに残っている。それは、キリストにあってはじめて取り除かれるのである。今日に至るもなお、モーセの書が朗読されるたびに、おおいが彼らの心にかかっている。しかし主に向く時には、そのおおいは取り除かれる」（コリント第二 3:12-16）。

ユダヤ人は、キリストをメシヤとして受け入れることを拒んだ。そして彼らは自分たちの儀式は無意味なこと、また犠牲と捧げ物はその意義を失ったことを認めることができなかった。彼ら自身によって頑固な不信のうちに引かれた幕はなお、彼らの思いの前にある。それはキリスト、すなわち律法の義を受け入れるなら取り除かれるのである。

キリスト教世界の多くの人々は、自分たちの目と心の前に覆いがある。彼らは廃されるものの最後を見ない。彼らはそれがキリストの死によって廃止された礼典律にすぎないことを見ない。彼らは道徳律が十字架にくぎづけられたと主張する。彼らの理解力を暗くする覆いは重い。多くの人の心は神に対して戦争をしている。彼らは神の律法に服さない。彼らがこのお方の統治の規則と調和するようになって初めて、キリストが彼らに対して効力をもつのである。彼らはキリストを自分の救い主だと語るかもしれないが、このお方は最終的に彼らに次のように言われるであろう、わたしはあなたがたを知らない。あなたは神の聖なる律法の違反のゆえに神に対して本物の悔い改めを働かせているであろうか。またあなたはわたしを信じる本物の信仰を持つことができない。なぜなら、神の律法を高めることがわたしの使命だったからである。

## キリストのご品性の写し

パウロは、道徳律も礼典律のいずれも、わたしたちの時代の牧師たちがあえてするような提示はしなかった。ある人々は、非常に神の律法に反感を持ち、それを公然と非難し、汚名を着せるために道を外れるであろう。こうして彼らは神の大権と栄光を蔑み、侮辱を注ぐのである。

道徳律は型や影であったことはなかった。それは人の創造以前に存在していた。また神の御座が続く限り、永続するのである。神は人を救うためにご自分の律法の一つの規則でも変更したり、改めたりすることはおできにならなかった。なぜなら、律法はこのお方の統治の基礎だからである。それは変更不可であり、改良不可であり、無限にして、永遠である。人が救われ、また律法の栄誉が維持されるためには、神の御子をご自身を罪のための犠牲として捧げる必要があった。罪を知らないお方が、わたしたちのために罪となられた。このお方はわたしたちのためにカルバリーで死なれた。このお方の死は、人に対する神のすばらしい愛と、また神の律法の不変性を示している。

山上の垂訓で、キリストは次のように宣言された。「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。よく言うておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」(マタイ 5:17, 18)。

キリストは律法ののろいを負われ、その刑罰に苦しみ、人を神の律法が守れ

る場所、また贖い主の功績を通して受け入れられる場所へおく計画を完成に至らせた。そしてこのお方の犠牲によって、栄光が律法の上に降り注がれた。そのとき廃されることのない栄光―十の戒めの神の律法、このお方の義の標準―が廃されたものの最後を見ていたすべての人にはっきりと認められたのであった。

「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」(コリント第二 3:18)。キリストは罪人の弁護人であられる。このお方の福音を受け入れる人々は顔おおいなしにこのお方を眺める。彼らはこのお方の使命と律法の間接性を見て、救い主によって表された通りに神の知恵と栄光を認める。キリストの栄光は律法のうちに表されている。それはこのお方のご品性の写しであり、このお方の変化させる力はこのお方のすがたに変えられるまで魂の上に感じられるのである。彼らは神性にあずかる者となり、ますます自分たちの救い主に似るように成長する。神のみ旨に一致して一步一步前進し、ついに完全に至るのである。

律法と福音は完全に調和している。各々は互を支持する。律法の最大限の大権のうちに、それは良心に立ち向かい、罪のための供え物としてキリストの必要性を罪人に感じさせる。福音は律法の力と不変性を認める。「律法によらなければ、わたしは罪を知らなかった」とパウロは宣言する(ローマ 7:7)。罪の自覚が、律法によって心に迫るとき、罪人を救い主へと駆り立てる。彼は自分の必要のうちに、カルバリーの十字架によって備えられた力強い論拠を提示することができる。彼はキリストの義をわがものと主張することができる。なぜなら、それはすべての悔い改めた罪人に与えられるものだからである。神は宣言なさる、「父がわたしに与えて下さる者は皆、わたしに来るであろう。そして、わたしに来る者を決して拒みはしない」(ヨハネ 6:37)。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(ヨハネ第一 1:9)。(レクテッド・メッセジ 1 巻 236-241)

した。陸もありませんでした。ただこの広大なたゆまずうねる大洋があるだけでした。男も女も、少年も少女も、あるいは鳥も動物もいませんでした。海に魚さえいませんでした。ただ霧と水の中に光があるばかりでした。

「神はその光を見て、良しとされた。神はその光とやみとを分けられた。神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。第一日である」。

第一日目です!この昔の世界のすべての始まりそのものです。時の始まりです。歴史の始まりです。人類のすべての幸せと悲しみの始まりです。なぜなら、この日に、大いなる愛する創造主は、思いのうちにすばらしいご計画をいだいて、この真っ暗な惑星(わくせい)、この暗い宇宙の小さなちりに近づき、「光あれ!」と言われたからです。

## ブロッコリーの豆腐キッシュ

### ■材料（4人分）

|        |         |        |        |
|--------|---------|--------|--------|
| 豆腐     | 1丁      | 長芋     | 70g    |
| 味噌     | 小さじ2    | ターメリック | 少々     |
| にんにく   | 1片（10g） | 玉ねぎ    | 1/2個   |
| ブロッコリー | 1個      | しいたけ   | 4枚     |
| オリーブ油  | 小さじ2    | 塩      | 小さじ1/3 |
| すり白ゴマ  | 小さじ2    | 顆粒昆布だし | 小さじ1   |

### ■作り方

1. 豆腐に加熱してから、キッチンペーパーで包んで重石をして、しっかり水気をきります。
2. にんにくをみじん切りにしてオリーブ油と一緒にフライパンに入れます。
3. 玉ねぎを横に薄切りにします。
4. フライパンを弱火にかけ香りが出てきたら、玉ねぎと塩を加えてよく炒めます。
5. 3しいたけは薄切り、ブロッコリーも薄切りにします。
6. フライパンにしいたけやブロッコリー加えて更に炒めて、白ゴマを加えて火を消します。
7. 長芋は皮を剥いて、適当に切ります。
8. 長芋を水切りした豆腐とターメリックと一緒にフードプロセッサーで混ぜてなめらかにします。
9. 8.もフライパンに加え全体を混ぜる。
10. 材料を耐熱皿に入れて、平らにし、200度のオーブンで約20分焼いたら、完成です。

## 教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



## 聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係  
是非お申し込み下さい。

## 書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。





聖書物語

## パート1 第4話

### すべてのものは、どのように始まったか? (II)

水、そして暗やみです。

ちょうど聖書が「やみが淵（ふち）のおもてにあり」とある通りです。

とつぜん、わたしたちは自分たちだけではないことに気がつきました。だれかがここにいます。わたしたちにはわかります。感じます。やみと、空っぽと、孤独（こどく）のただ中に、神さまがおられます。神のみたまが「水のおもてを」動かしておられます。神さまはご自分が創造された世界をごらんになって、それをどのようにしようか計画を立てられました。

突然、どこからか、それがどこからかわかりませんでしたが、声が聞こ

えました。音楽のような力強い鳴り響くような、今までに聞いたどんな声とも似ていない声が、光に場所をゆずるようにとやみに命じました。

たちまち、やみは消え去りました。わたしたちは再び見ることができました。でも、あまり遠くは見えませんでした。ほんの数十センチ、もしかしたら、数メートルくらいです。なぜなら、あたりは全部こい霧（きり）に囲まれていたからです。しかし、やみの後に光があるのはなんとすばらしいことでしょう！

そこに青空はありませんでした。明るい日光もありませんでした。ただ明るい霧があるばかりで、その下には水、どこもかしこも水ばかりで

